

研究ノート

井関隆子著『隆子千首詠』の紹介

吉海直人

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・特任教授

A Bibliographical Introduction to
IZEKI Takako's "Takako Sensyu-ei"

YOSHIKAI Naoto

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor

令和三年の正月、『井関隆子日記』を世に出された深沢秋男先生の訃報に接した(享年八十五)。先生とは研究の時代も分野も(年齢も)異なっているが、たまたま百人一首の注釈と井関隆子の資料という二つの接点^①があったことで、長らく情報交換などをさせていただいた。私の方が年少であるにもかかわらず、年上の研究者に接するような応対だったので、ずっと申し訳なく思っていた。

まったくの偶然というのか、縁は異なるものというのか、深沢先生が亡くなられた直後、ある古書目録に「隆子千首詠(井関隆子)」という書名の和本が掲載された。本当に井関隆子の作品なのかどうか半信半疑ながらも、何かの縁と違って取りあえず注文してみた。幸い競争相手もいなかったらしく、スムーズに入手することができた。

届いた本を手にとって調べてみたところ、天保六年(一八三五)年睦月と天保六年三月の二つの跋文があり、さらに末尾に天保七年十月二十二日の重明(詳細未詳)の奥書がついていた。そこであらためて跋文をはじめから読んでみたところ、まず、

天保とふとしの六とせむ月のはじめ源隆子はるぼろにをろがみてしるす。

と書かれていた。天保六年睦月であるから、次の三月の日付より二か月前である。どうやらここまでが井関(源)隆子自身が記した跋文のようである。単に「隆子」とあるだけでは人物の特定はできないが、「源隆子」とあれば、ほぼ井関隆子のことと見て間違いないまい。なお天保六年は隆子五十一歳の年にあたる(日記より五年前)。

それに続く源園雄の跋文は、

鹿野園^{かやぞの}の刀自隆子の君は庄田主税源安僚^{やすりょう}君の女従五位下縫殿頭菅原朝臣親経^{ちかね}君の母也皇国の古へ学びをたふとび奈良の葉の名におふ宮の年ふるを好ませ給ひて常によみ出給ふ

云々と書かれており、井関隆子の出自紹介に始まり、彼女の歌人としての才能にまで触れられていた。これはおそらく隆子に依頼されて書いたものであろう。最初に「鹿野（屋）園」とあるのは、隆子の住んでいた井関邸の離れのこと、それを自ら「鹿屋園の庵主」と称していたことによる。

なお二つの跋文は、縣居神社に奉納することを踏まえてか、文体が祝詞形式に書かれている。いずれにしてもこれで隆子の資料が一つ増えたといつてよさそうである。深沢氏の魂に導かれて、いい買い物をしたかもしれない。

二

ただし気になることがないでもない。というのも、跋文に記されている源（林）園雄という国学者は、インターネットで調べてみると文政二年（一八二九年）二月二十七日に没している⁽²⁾とあったからである。それが正しければ、天保六年に跋文を書けるはずはあるまい。もちろん同姓同名の別人（あるいは二世）がいてもおかしくないのだが。

こういった不安要素が存するので、自信をもって井関隆子の新出資料とは主張できそうもない。こんな時こそ、深沢先生にお見せしてご意見をうかがうのが一番であった。なにしろ千首というのは膨大な数である。『井関隆子日記』にも八百首もの歌が収められているが、それ以前の天保六年にそれを上回る千首もの歌を詠じた歌集が見つかったのであるから、歌人としての隆子研究の貴重な資料となることは間違いない。

そう思っていたところ、私の疑問に対する答えは、既に深沢先生が用意しておられた（書き残しておられた）。というのも、あらためて『井関隆子日記上巻』を見直してみたところ、天保十一年七月二十三日条に、

此事林国雄てふ男、例のかいなでの歌詠にて、ここへも講釈などに来れりしが、此わたりをゆきめぐり、詳しく案内しりたちとて語りしを、其みなもとの水筋ばかり、いささか形にも書て記しつ。
(25頁)

と、なんと源国雄のことが記されていたからである。しかも脚注に、林国雄―国学者。宣長の門人。狂歌を好み、後、和歌の道に入る。天保十年没。六十歳。『日本書紀写誤考』『詞の緒環』等を著す。とあって、深沢先生は林国雄の没年を天保十年（一八三九年）没と注されていた。これなら天保六年に跋文を書くことは可能である。

ついでに『井関隆子の研究』の方も調べてみたところ、この中にも、林国雄は、前年の天保十年二月、六十歳で没している。林は平田篤胤に学んだらしいが、自分では本居宣長の門人と称していたと
のことである。『詞の緒環』二巻は天保九年の刊行。（76頁）

と同じようなことが書かれていた。そのことは日記の天保十一年十一月六日条にも、

此もの一とせ身まかりぬと聞つ。世に長からましかば、はたいかなるひが事共をか物せましを、とく失たるなむ、いささかはうし
ろやすかめる。
(374頁)

と書かれてある。深沢先生は、この文章は亡くなった人に対する言としてはかなり厳しい口調であるとコメントされているが、その国雄が「隆子千首詠」の跋文を書いているとすると、かつてはそれなりに親しく交流していたことが察せられる。

なおここに「一とせ身まかりぬ」とあることで、深沢先生は一年前の天保十年に亡くなったと見ておられるのだろうか。しかし「一とせ」は数年前のある年でもかまわないはずである。文政二年没と天保十年没では十年の差がある。資料不足というか調査不足で確定はできないものの、ここでは仮に天保十年没の可能性を示唆しておきたい。

三

ここまで来て、日記の中に肝心の千首詠についての記事もあることがわかった。天保十一年三月三日条に、

今は六年にやなりぬらむ。遠つ近江の国に、縣居の翁の神社とてまつられたるよし聞えしかば、己が数詠にしつる千首の歌たよりに付て其社へ納めたりき。其歌どもの下書の残れるを今見るに、日を重ねとかくかうがへ詠出むだに、少しもよろしと思ふ歌はまれなるを、まして一日に百歌詠みつ、十日の程に物しつれば、殊にいみじう聞ぐるしう拙き歌どもなるを、いかにしつることぞと後に思へばいと浅ましきを、其をり思へりしは、かの翁は古事を吾ものとして、歌よみ文かき人にも教へつるより、今おれおれしき己れらまで、いささかにも古事のかたはしいひ出るは、またくかの翁のいさをのふゆなる事のうれしさに、拙くともよしざばれとて、いささか幣代も添て奉れるは、其いつきそめらるる翁神を祝ひまつる心なりしが、その歌どものいとあしければ、神はうけじとこそ。

(80頁)

と記されていたのがそれである。そこで調べてみると、賀茂真淵を祀った縣居神社（静岡県浜松市）は、天保十年の創建とされている。この記事は創建後になるが、肝心の「隆子千首詠」は天保六年なので、ここにも時間的な誤差が生じていることになる。

ただしこの場合は神社の創建ではなく、「縣居翁靈社」の石碑が建立された天保六年のことと見れば問題なさそうである。それでも日記に「今は六年にやなりぬらむ」とある点、天保十一年の六年前だと天保五年になるので、これだと石碑建立の一年前になってしまう。これは隆子の記憶違いなのだろうか。

いずれにせよ千首詠は、一日百首詠み、それを十日続けることで合計千首にしたことがわかった。こういったことを生涯に二度も三度も

行うことはないだろうから、この記事こそは「隆子千首詠」のことを具体的に記したものと見てよさそうである。そのことは重明の奥書に、此千首詠は縣居翁の靈社へおさめてよと大江戸の隆子の君より白地の綺の表紙紫の箔の帙に桐の上箱して人伝もておこされしなりそを臣下庵大人写してよと与はれしかば写し物する序に己も別に一卷写し畢ぬ天保七年といふとしの神無月廿日あまり二かの日重明

と記されていることも合致する。なお奥書によれば、隆子が奉納した自筆原本は、白地の綺の表紙だったことがわかる。

この千首詠については、当然、深沢先生も興味を示されたらしく、日記の脚注に、

千首の歌―県居神社所蔵の県居文庫は、戦災により、一部を除いて焼失した。また、それ以前の文庫目録にも、この千首の詠は記録されていない。

とコメントされている。これを見る限り、深沢先生は千首詠を探したもののたどりつけなかったようである。あるいは隆子が無名だったので、神社側でも記録に留めなかったし、大切に保管しなかった（焼失あるいは売却した）のかもしれない。

四

おそらく自筆本は散逸してしまったのだろうが、重明が写した二本のうちの一本が、二百年近い歳月を経てここに出現したのである。隆子自身は自詠を拙いと謙遜しているが、本書所収の歌をつぶさに調査すれば、そのことが当たっているかどうかも確認できるはずである。本書をもう少し早く入手できていれば、そして深沢先生にお見せする（報告する）ことができたなら、きっと大喜びされたに違いない。それを思うと悔やまれてならない。せめて深沢先生のご霊前に報告できる

ことをよしとしたい。

最後に本書の簡単な書誌を記しておく。本書は横刷毛目の茶色い表紙で、左上方に書題簽が貼られており、そこに「隆子千首詠」と記されている。これを正式書名としたい。本の大きさは半紙本（タテ23.7センチ×ヨコ16.2センチ）で、装丁は袋とじ。料紙は楮紙である。左上にいささか馬喰があるが、幸い文字には掛かっていない。

丁数は全五十四丁。最初の五十丁が歌集（丁付けあり）で、後の三丁が囀雄の跋文、最後の一丁オモテが重明の奥書になっている（ともに丁付けなし）。歌集の方は一面十行書きで、一行に題と歌が記されている。最初の歌は、

立春朝 水薦かるしなぬ（信濃）の真弓春のくる今朝のあさけの
ゑまはしき鴨

であり、最後の歌は、

寄雪祝 うちきらし豊島国原ふる雪の深くも御代をいのりつる鴨
となつてゐる。最初の二百首が春題で、次の百首（十一丁表）が「首
歌」から始まる「夏題」、次に十五丁裏の十首目の題が「立秋朝」とな
っており、ここから「秋題」二百首となつてゐる。続いて二十五丁裏
の十首目の題が「初冬の暁」となつており、そこから「冬題」百首に
なつてゐる。ここまですが四季で、次は三十丁裏の十首目が「寄天恋」
となつており、ここから「恋題」二百首になつてゐる。以下は雑で末
尾が「祝」で終わつてゐる。

一丁に二十首（表十首・裏十首）あるので、五十丁でちょうど千首
になる。日記に書かれていることを信じれば、一日百首、十日で千首
を詠んだ計算になる。これは和歌の鍛錬でもあろうか。隆子は国学者
真淵の霊社に何か願をかけたのであろうか。もちろんこういつた新出
歌から、隆子の実生活が垣間見られるわけではないので、資料的価値
はそんなに高くはあるまい。それでも隆子の資料が増えたことだけで
も価値は認められよう。

跋文は一面七行書きで、奥書は全六行で収まっている。奥書を信じれば、本書は「縣居翁霊社」へ奉納された自筆原本を重明が写したものであるということになる。もしそうなら、重明は浜松在住の人であろうか。今後の研究の進展を俟ちたい。

〔注〕

（1）百人一首の注釈では、仮名草子作者の齋藤親盛（如備子）の百人一首注を和泉書院から出版していただいた。井関隆子では、所蔵している『物がたり合』中の「いなみ野」と『雅文』（徒然草）が隆子の作品であったことを報告した。

（2）『国学者伝記集成』と『和学者総覧』にあたってみたが、やはりともに文政二年没になつてゐた。林国雄の没年を変更するためには、もっと詳しい資料の検証が必要と思われる。

【冒頭和歌翻刻】

『隆子千首』

立春朝 水薦かるしなぬの真弓春のくる今朝のあさけのゑまはしき鴨

立春天 振さけてみればのどけし蜻蛉の春はあめより立にけらしも

立春日 ひさ方の空もうららに此朝け春とはしるき日の光かも

立春風 吾門の松のうれ吹朝かぜもあらくはふかず春のしるしか

立春霞 あまのはら霞きらひて萬代にあはむともへるはるは来にけり

立春雲 玉くしげ明ゆくそらに立なびく雲にまじりて春はきにけむ

立春雪 天さらしいや降しける雪のうちにけふる春のあととはしるけ

む

立春水 むすびつる樽井の水はるきぬと袖ひつばかり解そめにけり

立春水 梓弓はるたつけさのみもひにぞまづ大峰の水をくみけむ

立春都 あたらしき春にあけぬとうちひさす都はうへもにぎはひにけ

り

【末尾和歌翻刻】

春祝 はるさればおもてるばかり武蔵野に御代の栄えとあしび花咲
 夏祝 水無月に八十くまおちず照日なすいゆきわたらす君がめぐみか
 秋祝 秋の田に苜ほす稲の八束穂のみづほの国ぞあやにたふとき
 冬祝 ももちはる世にしすまへば年ぬちにたぬしきことぞ雪と積れる
 寄梅祝 あたらしき春のはじめに折かざす梅のあそびは萬代にもが
 寄桜祝 この花のさくとふ神の御代よりぞめでこし花はこの桜ほな
 寄郭公祝 足引の山ほととぎすをちかへりながなく声は千代の数かも
 寄雁祝 あまのはら秋霧かへりくるかりの年にかはらぬ声聞ゆなり
 寄紅葉祝 さにつろふ山の黄葉は千いほ秋長いほ秋の君がかざしか
 寄雪祝 うちきらし豊島国原ふる雪の深くも御代をいのりつる鴨

【跋文翻刻】

衆のさら山^②さらにはむはことふりにたれど
 水垣のひさしき御代^③のふるごとを心おそきおのれら
 さへあさ沢におふる花^④かつみかつながらも今の
 世にうたふこととなるは此縣居のおきな神のいかし
 ほ^⑤こいかしき倭心をふりおこし給ひ焼鎌^⑥のとかま^⑦
 もてしみたてるしもとを苜^⑧そげおほとれるむぐら^⑨を
 かきはらひ葉^⑩広くまかしひろく正しきいにしへの
 みちを踏分てくもり夜のゆく方しらぬ世人を
 いざなひ給ひしみいさをなも有けるされば久堅の
 天の下の人もていつきたふとみて御やしるを
 さだめまさしめけるは風のとの遠つあふみと間に

つばさなすいたらむことのかたければ天保とふとし
 の六とせむ月のはじめ源隆子はるばるに^①
 をろがみてしるす^②

鹿野園の刀自隆子の君は庄田主税源安僚
 君の女従五位下縫殿頭菅原朝臣親経君
 の母也皇国の古へ学びをたふとび奈良の葉の
 名におふ宮の年ふるを好ませ給ひて常に^③
 よみ出給ふ言の葉ども飛鳥藤原の朝にはの
 ぼり給ふともならのみやよりは下り給はずそのかみ
 額田の姫王石川郎女などの歌にたへなるもも
 うた^④などつらねたるは聞えず今の都となりて此道
 さかりにおこなはれたる世の女房などにも千うた^⑤
 などはよまれたる跡もみえざりけり此千首は今の
 世の人のものする数よみてふ事にならひ給ひて
 日数を定めよみ給へりさればすこし後なる姿も
 たまたままじれるは後の題に叶へむとせられしゆゑ
 おのづから然なるべし此題は前大納言為家卿の
 中院の亭の集ひの時の出題にならひ給ふ也
 けり今の世にするしある巻は夏の部一題恋
 の部五題しるしおとせるをそは此巻の終に
 六題新に加へ給へりかつ釈教二十題は祝の
 題に替給へるなどはいとめでたくおほよそ人に
 ことなる雄々しき御すさみにてますら雄はづ
 かしき御業になも有けるこたみ書清め給しりへ
 にいささむら竹いささか玉の緒琴のことの
 よし書しるし侍りぬ

源園雄

天保六とせといふ年の弥生

【語釈】

- (1) 「さららぶ」は霞が立ち込めること。
- (2) 糸のさら山―岡山県美作に糸の皿山あり。序詞として同音の「さら」を導く。
- (3) 水垣の―「瑞垣の久しき時ゆ」（万葉集五〇一番）とあるように、石上の布留の社を示すことから「古る」を導く序詞的用法。
- (4) 花かつみ―野花菖蒲のこと。福島県浅香沼が名所。また大阪の住吉神社近くの浅沢沼も名所となっている。「花かつみ」が同音の「かつ」を導いている。
- (5) いかしほこ―祝詞に「いかしほこ」とある。同音の「いかし」を導く枕詞。
- (6) 焼鎌のとがま―大祓詞に「焼鎌の利鎌以て」とある。
- (7) ちもと―若木あるいは若枝のこと。
- (8) おぼとれる―蔓などが絡まって乱れていること。
- (9) 葉広くまがし―『古事記』中巻に「葉広熊白^{がし}」と見えている。
- (10) 風のとの―「風の音の」は「遠」を導く枕詞。
- (11) はるばろ―「はるばる」に同じ。
- (12) をろがみて―「拝みて」で「拝して」の意味。
- (13) 奈良の葉の名におふ宮の年ふる―『古今集』の「神無月時雨降りおける ならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ」（九九七番）を踏まえる。「名におふ宮」は平城天皇のこと。
- (14) ももうた―百首歌のこと。これを「数よみ」と称している。
- (15) 千うた―千首詠のこと。「為家千首」の題をモデルにしているか。



〈図版1 表紙〉

立春朝 水鳥さうさゆめの真う喜れうさ朝めあさきの名ぬさう時
 立春天 柝さけて見さ悠のさう 晴陰の音とあなうさうさうさうさうさ
 立春日 幼さるれさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 立春風 雲内の柝さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 立春霞 あさけさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 立春雲 雲さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 立春雪 天さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 立春氷 氷さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 立春水 水さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 立春都 都さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

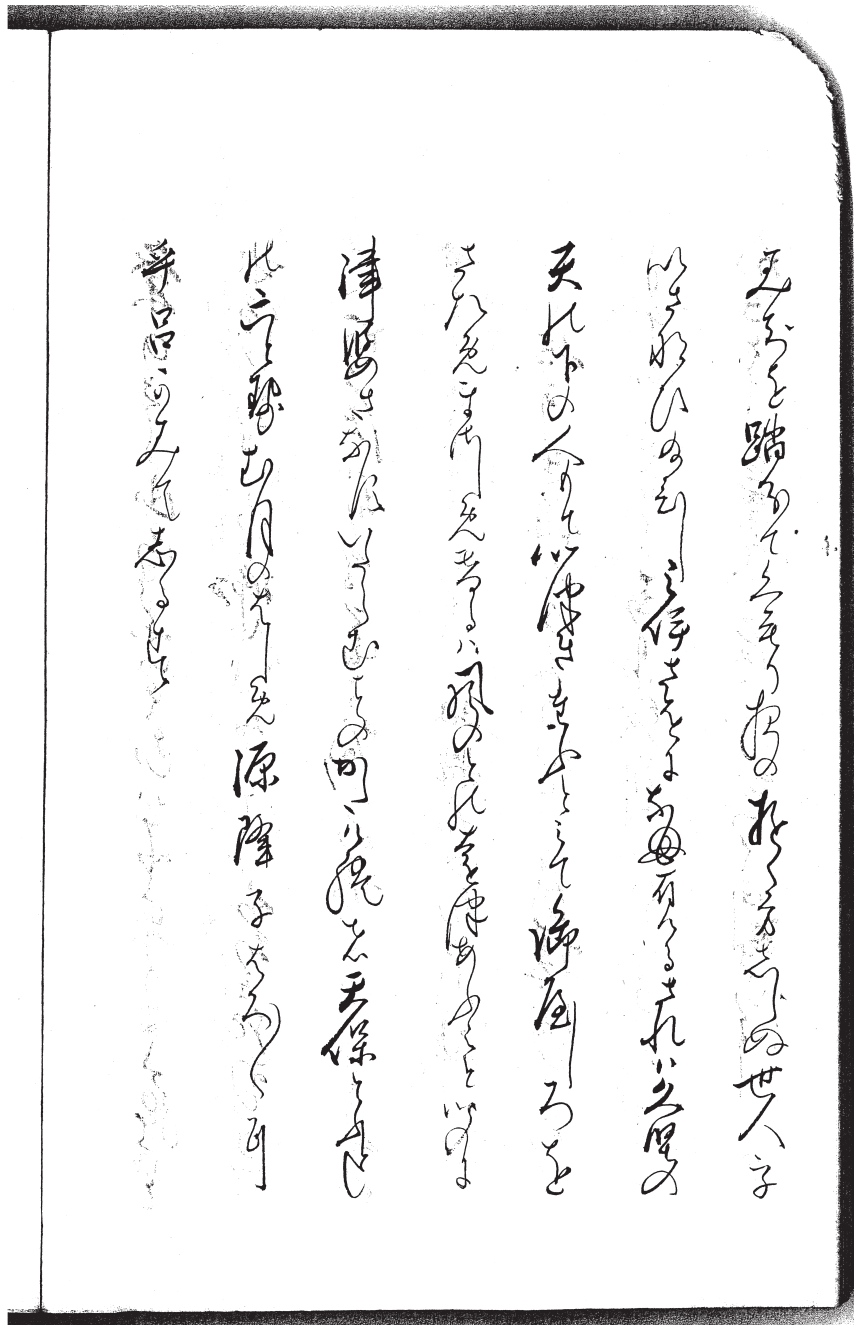
〈図版2 冒頭和歌十首〉

春 祝 春をば春をばあけのこはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣
 夏 祝 小春月よはつとあけのこはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣
 秋 祝 秋の田は萌ゆるを 稲の小春のこはらうの氣えと 阿波の氣
 冬 祝 冬をば冬をばあけのこはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣
 寄梅 祝 あけのこはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣
 寄櫻 祝 こはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣
 寄萩 祝 こはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣
 寄雁 祝 あけのこはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣
 寄紅葉 祝 こはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣
 寄雪 祝 こはらう 武蔵野は海人の氣えと 阿波の氣

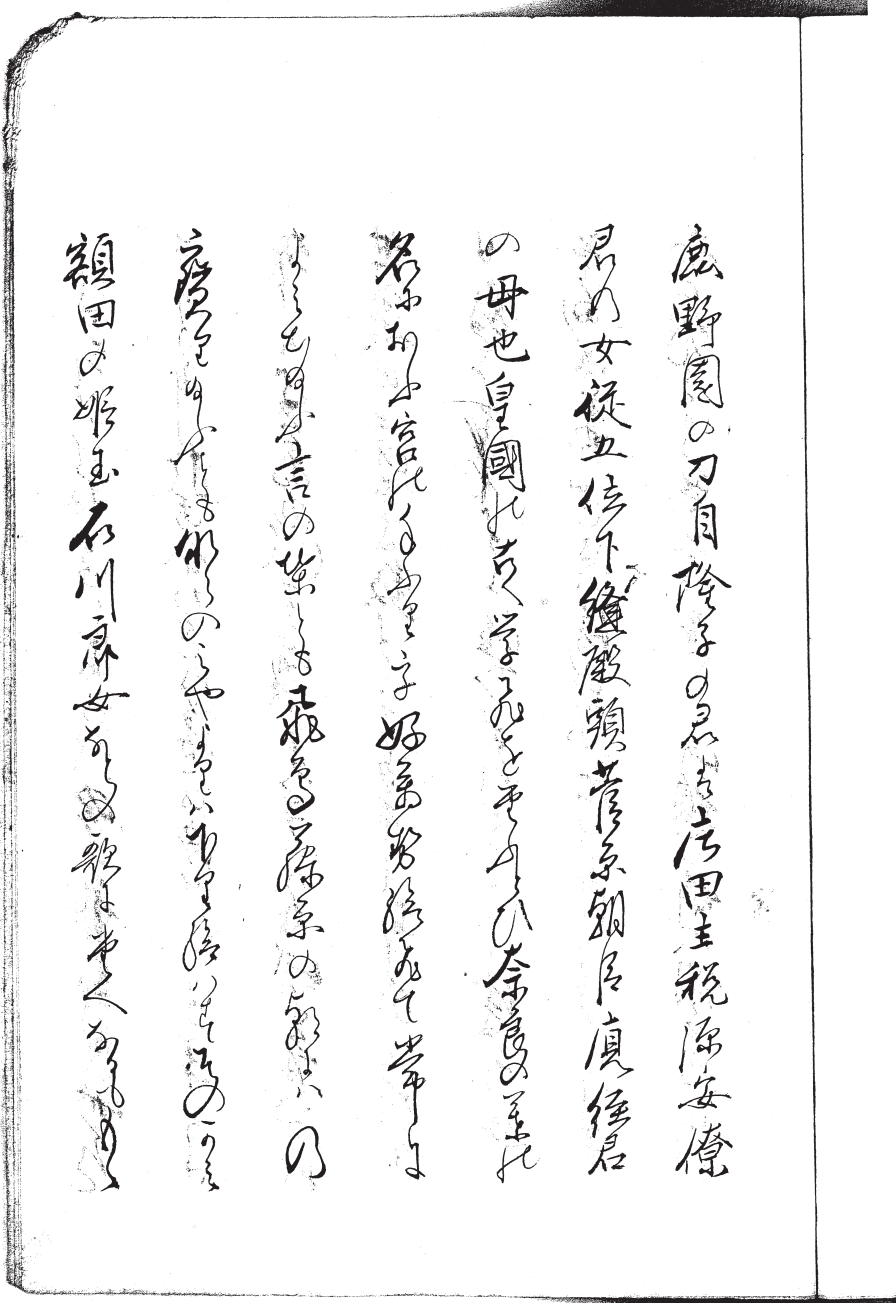
〈図版3 末尾和歌十首〉

糸のしほふくふくはふくふくはふくふくは
水鏡のつらつら水鏡のつらつら水鏡のつらつら
えりふくふくふくふくふくふくふくふくふく
甘くふくふくふくふくふくふくふくふくふく
あはれふくふくふくふくふくふくふくふくふく
おはれふくふくふくふくふくふくふくふくふく
かたむくふくふくふくふくふくふくふくふく

〈図版4 跋文1〉

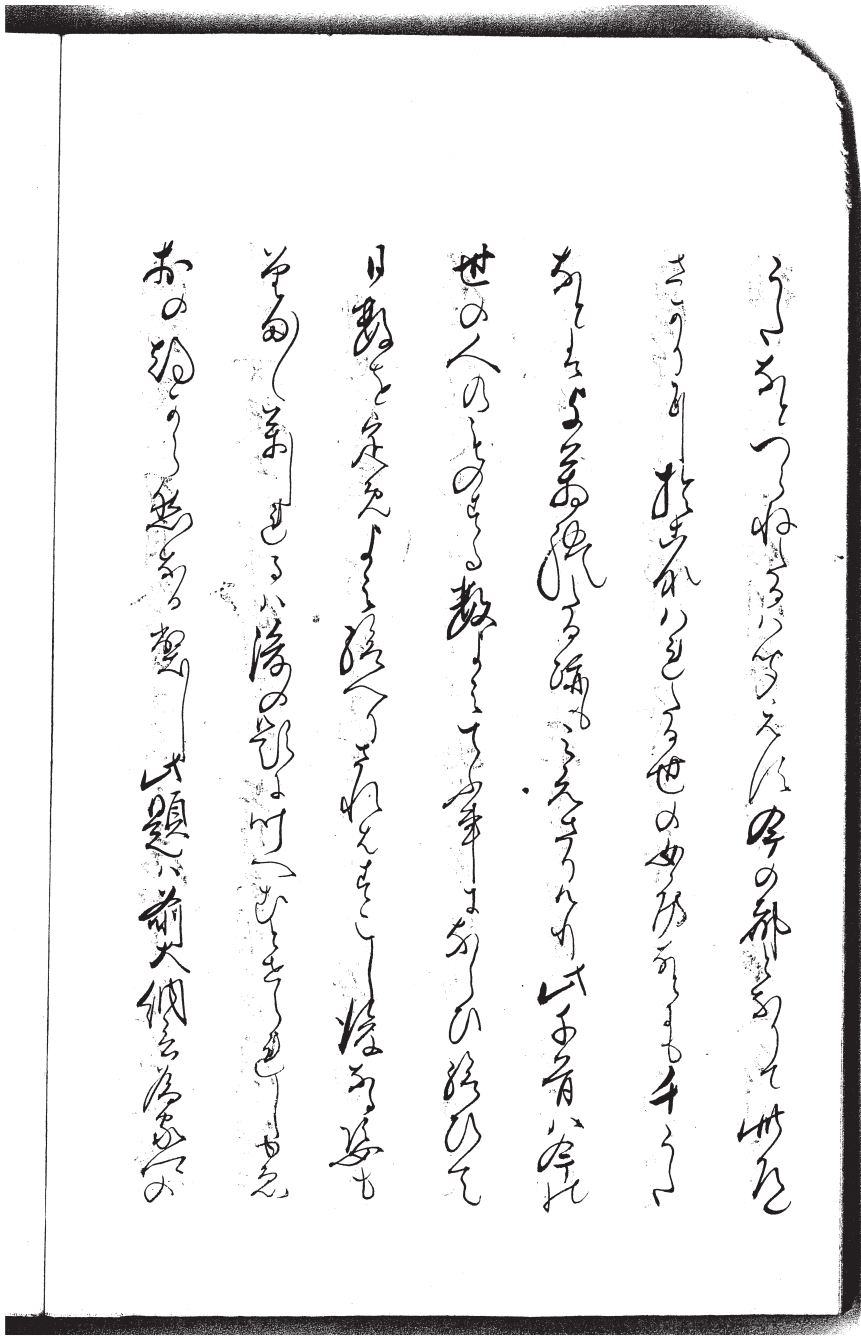


〈図版5 跋文2〉



鹿野園の刀自陰子の名は田主税海安僚
 君の女祓五位下後殿頼菅系朝臣貞徳君
 の母也皇國は女学を以てその一の奈良の是れ
 名ふ所小宮人の女学子好まむ給はるや事
 今も此の言の葉も花をよみ給ふの如く
 言ふをよみ給ふ如くの花をよみ給ふの如く
 額田の姫玉石川京女を以て彼も中へ

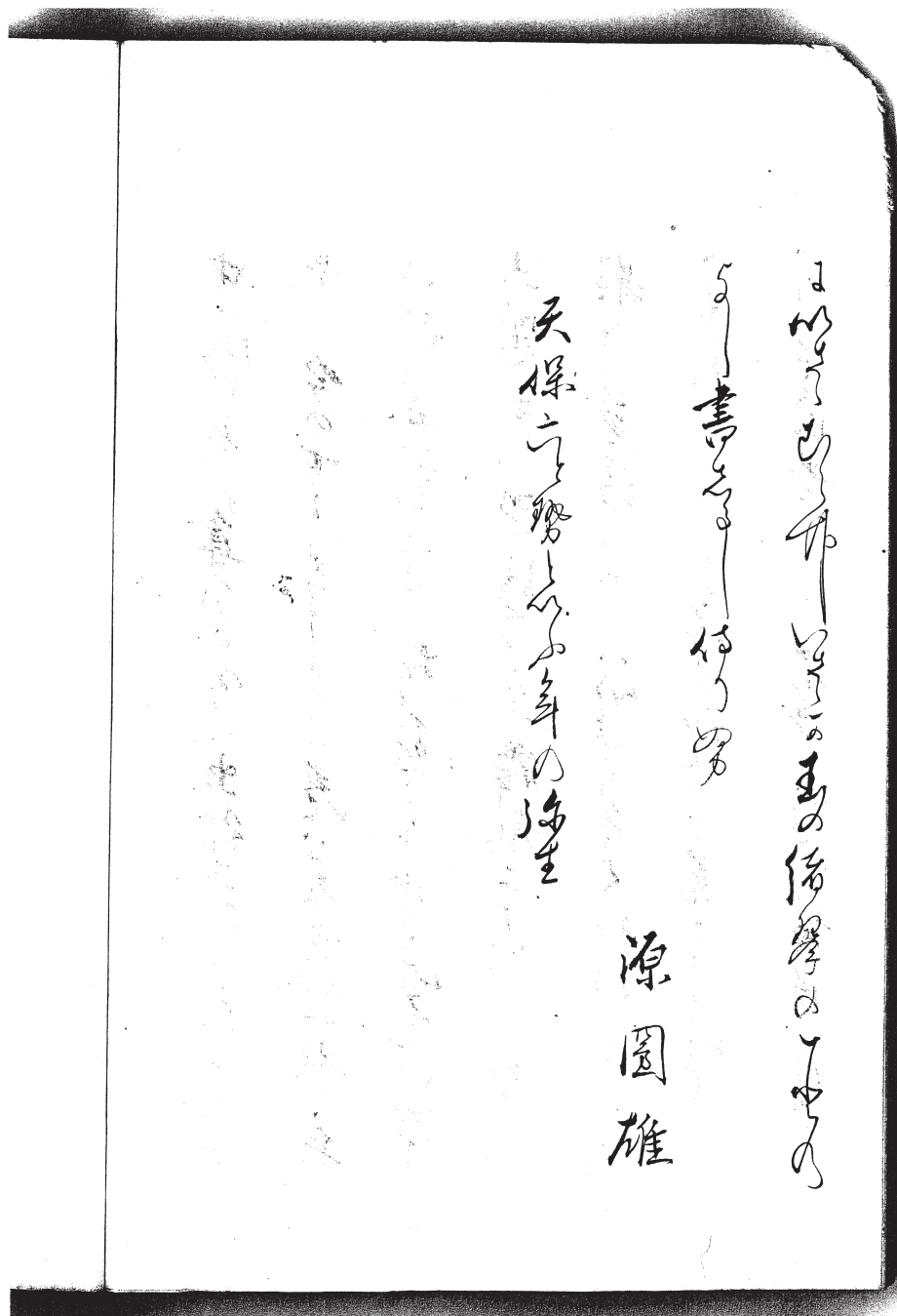
〈図版6 跋文3〉



〈図版7 跋文4〉

中院の亭は集ひのゆの出せふあふりて
 せう今の世にさうある君は其の歌一部
 の部五部とておれ勢を托もはるの地
 六題新小加路くふ釋教二十部は初
 取りて終了くふは心とて多くおれ人よ
 こやとて歌へて見ゆはるしそあはるは
 一しとて海業よめ有とて一しとて書居るは

〈図版8 跋文5〉



天保二年癸卯の冬

源 園 確

〈図版9 跋文6〉

木をより後、縣城の二重に
 大月人の降参の事より多岐の侍の表紙紫の箱に
 帳は桐の表紙にて人借りておきけりし事と
 月を庵へ入りし事をもてしに
 序より已れりし一巻を
 二如の日重明

〈図版10 奥書〉